

第4章

第4期保幼小連携・接続推進事業の 成果と課題

第1章から第3章では、市内小学校での「連携・接続」の取組状況や「連携・接続」に関わる研修会の内容、小学校を核に隣接する就学前施設を1つのブロックにした2つのブロックの「連携・接続」に関する実践研究等の取組を紹介してきました。

第4章では、第4期「保幼小連携・接続推進事業」の成果と課題、そして就学前施設や小学校で「連携・接続」を進める際にどのようなことを大切にすればよいのかという視点で、第4期（令和6・7年度）の取組を通して見えてきたことをまとめました。第1期から第3期の「保幼小連携・接続推進事業 取組まとめ」の“第4章「連携・接続」で大切にしたいこと”と合わせてご覧ください。

第4章 第4期保幼小連携・接続推進事業の成果と課題

(1) 主な成果

○学校の状況調査（小学校・義務教育学校前期課程）より

- ・令和6年度と7年度の学校の状況調査の「幼小こ小の連携」の調査結果から、保幼小連携・接続は、生活科や総合的な学習の教科で行われていることが多い。続いて授業見学、体育、国語、音楽での取組が続く。教科以外での交流活動として、学校見学、交流会、フェスティバルのような全体行事で連携をしていることが多い。合同の避難訓練の実施件数が、21校（R6）から63校（R7）と3倍になっている。このことから、防災を地域単位で捉え、一緒に訓練を実施することが広がっていると考えられる。交流活動の計画や実施に伴って、教職員の打ち合わせや振り返りなどの会議が設定され、情報交流の機会につながっている。また、交流活動が互いの子どもの学びにつながることを実感し、次の連携を考えたという報告があった。
- ・スタートカリキュラムを作成している小学校は、令和6年度調査では15%、令和7年度調査では17%であった。作成予定と回答している学校は横ばい傾向であり、スタートカリキュラムの作成は浸透しているとは言えない状況であることが分かる。

○保幼小連携・接続研修

研修会参加者のアンケートより

（就学前施設）

- ・就学前施設と小学校の学びの共通点と相違点があることがよく分かった。子どものために教育・保育を充実させるという土台になる考え方は共通しており、どのように歩み寄っていくか、できることは何かを引き続き考えていきたい。
- ・保育では子どもの「やりたい」気持ちから遊びが発展していくが、小学校では到達すべき目標があるなど、学び方に大きな違いがあることを知り、改めて考えることができた。入学時は環境や活動内容が大きく変わり、子どもたちの不安や負担が大きいので、交流や連携が大切だと思った。
- ・グループワークで、小学校の先生方と話ができ、良かった。学校現場の様子を聞くことで、見通しをもつことができ、自発性や主体性をより意識しながら、保育を考えたいと思った。
- ・小学校との連携・接続はどのように進めればよいのか分からないところがあったが、保育の充実や自分自身の力量を高めることが大切であると思った。そして、子どもの姿をしっかり伝えていきたいと思った。

（小学校・義務教育学校・支援学校）

- ・幼児教育についての知識や理解を深めることが大切である。「見守る」「『なぜ』に付き合う」ことが苦手な先生が多いと思うので、今日の学びを学校内で伝えたい。
- ・自由進度学習や自律的な学習者の育成に取り組んだ小中学校から、思った以上の効果があったと聞いている。この研修で、改めて子どもたちに委ねることの大切さが分かった。

- ・主体性を大切にする環境設定や大人の関わり方について、就学前施設の先生と共有し、知識や理解が深まった。生活科が果たす役割の重要性についても再認識できた。
- ・就学前施設の先生方の思いや子どもの様子、保護者の思いなどを聞く良い機会となった。環境に意味をもたせて、大人が子どもの様子から何を見取るかということは、保幼こ小に關係なく、どの段階でも大事であると感じた。

○保幼こ小連携・接続研究

(Aブロック)

- ・就学前施設の「めざす子ども像」が小学校の「めざす子ども像」「はぐくみたい子どもの姿」へとつながっていくことを「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識してまとめることで、共通理解につながった。
- ・教職員同士の交流では、小学校と就学前施設が互いに知らないことが多くあり、話をして明確になったので、情報交流をしていくことが大切と分かった。
- ・管理職だけでなく、担任の先生同士が話をすることで子どもの育ちを共有できた。交流の様子を保護者とも共有することで、保護者の安心感にもつながった。
- ・交流を深めることで子どもも保護者も安心できる教育環境になっていく。
- ・保幼こ小連携・接続の取組は子どもや保護者の就学に向けての安心につながるので、多くの地域で取り組んでいくべきだと感じた。
- ・小学校における接続カリキュラム作成・実施に向けた取組をさらに活性化していくため、小学校1年生と就学前施設5歳児の保護者に「就学に関し、不安を感じること」や「就学に関し、期待していること」など保幼こ小連携・接続についての内容でアンケートをとった結果の講師の読み取りは以下の通り。
 - 保護者は生活面、安全指導、学習習慣の家庭教育にフォーカスを当てている
 - ➡家庭と連携し、共に育てる意識
 - 保護者の満足度が小学校以降の役立ち感への認識にそのままつながる
 - ➡園における保幼こ小連携・接続に満足感をもってもらうための情報発信
 - 適応、学習、友達関係の不安を抱いている
 - ➡保幼こ小連携・接続を強化し、学びのつながりを確保する
 - 保護者の理解度も小学校以降の役立ち感への認識につながる
 - ➡まずは保幼こ小連携・接続の理解度をあげる取組を検討する
 - その年によって不安内容は変化する(ニーズが各年で変わる可能性)
 - ➡各年のニーズ調査が重要
- ・今後も連携・接続を継続し、小学校と就学前施設の相互理解のもと架け橋期のカリキュラムを作成し、交流活動を行い、発展させていきたい。それが子どもの主体性や探究心、学習意欲の向上につながると期待される。

(Bブロック)

- ・小学校では、1年生から6年生の「ファミリー活動」に取り組んでいたため、そこに5歳児が加わるという考え方で始められた。高学年の児童は普段から年下の子どもと接してお

り、5歳児との関わりにも生かされていた。低学年にとっては、普段は優しく関わってもらう方だが、自分たちより年の小さい5歳児との関わりで、お世話をしたり労わったり、いつもと違う立場を経験することで、学校だけではできない学びがあった。

- ・全学年が保育園・幼稚園と交流することで、1年生だけの負担とならずに、進めることができた。小学校が中核となり、今あるカリキュラムを生かすことで、持続可能な連携・接続になると考えたことが確信できた。
- ・交流を計画すると、教職員同士で打ち合わせや振り返りの会議をもつことになる。情報交流につながり、互いの教育・保育内容を理解し合ったり、子どもの学びを共有したりすることができた。教職員の関わりが大きな成果につながっている。
- ・就学前施設同士の交流は、子どもたちが同じ年齢の友達ができることや、知っている友達が増えることでの安心感につながっていた。3、4歳児も小学生と5歳児の交流を意識するようにしたことで、憧れたり楽しみにしたりする思いが高まった。架け橋期は5歳児だけではないと考え、園全体で取り組むことができた。
- ・保幼こ小の連携・接続は、地域の教育・保育力を高めることにつながる。今後も継続する必要性を感じている。

(2) 主な課題

- ・研究に取り組んだブロックの校園所からは、「子どもたちの交流だけでなく、教職員が交流したことが大きな成果につながった」「『めざす子ども像の共通理解と取組のつながり』を作成したことで、教育・保育内容や子どもの学びの共有となった」「小学校が中核となり今あるカリキュラムを生かして子どもも教職員も大きな負担を感じることなく取り組める連携・接続であることが持続可能な取組になる」「就学前施設同士の交流も、大きな成果がある」など、2年間の研究に取り組んで、校園所の相互理解や連携・接続の基盤をつくることができたという成果を感じておられる。この研究は第1歩であり、連携・接続はこれからどのように続けていくかを考える必要がある。
- ・連携・接続には、子どもたちの交流、教職員の打ち合わせや振り返りなど、様々な時間の確保が必要となる。それぞれの運営がある中で日程を調整することは難しく、年間計画を共有し合ったりこまめに連絡を取り合ったりして、工夫しながら決める必要があった。
- ・研究グループとして連携・接続を進めてきたが、地域には多くの就学前施設があり、丁寧に交流した経験があるからこそ、どうすれば広げられるのかを考えるとその難しさも感じる。
- ・小学校教員の就学前施設見学では、それぞれの年齢での子どもの発達や保育者の関わりを見ることができたが、見学だけでは分からないこともあると感じた。保育を体験したり、育ちについて話し合ったりすることでより理解が深まる。
- ・5歳児だけではなく3、4歳児や乳児との交流があれば、より子どもの育ちの発達段階が分かり、理解が深まると思った。